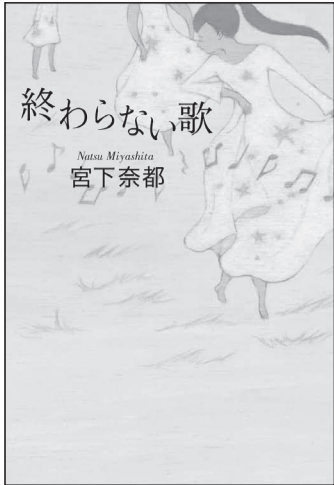


# 終わらない歌

## 宮下奈都



刊行記念  
応援ペーパー

ブルーハーツの  
ご用意を！

『終わらない歌』  
(実業之日本社)

2012年11月刊行  
定価 1365円(税込)  
ISBN 978-4-408-53615-6

あらすじ  
卒業生を送る会の合唱から3年、少女たちは二十歳になった。御木元玲は音大に進学したが、自分の歌に価値を見いだせなくて、もがいている。ミュージカル女優をめざす原千夏が舞台の真ん中に立てる日は、まだ少し先みたいだ……。ぐるぐる、ぐるぐる。道に迷っている彼女たちを待つのは、どんな未来なんだろう。

—<傑作『よろこびの歌』待望の続編、ついに登場！>—

## 著者からのメッセージ

「よろこびの歌」に出できた少女たちが、今、どこでどうしているのか、ずいぶん気になっていました。でも、彼女たちは作者の心配をよそに、それぞれの場所でそれぞれの速度で歩いていっている。追いかけて書きながら、眼がどきどき、ぞくぞくしていました。

この子たち、とんでもない……！  
ぜひ、読んでみてください。彼女たちに、今、ここで、出会ってやってください。  
宮下奈都

宮下奈都(みやした・なつ)

1967年福井県生まれ。2004年「静かな雨」で文壇新人賞佳作に入選、デビュー。07年に刊行された書き下ろし長編『スコレNo.4』が話題となる。著書に『遠くの声に耳を澄ませて』『よろこびの歌』『太陽の Pasta、豆のスープ』『田舎の紳士服店のモデルの妻』『メロディ・フェア』『誰かが足りない』『窓の向こうのガーシュウィン』、小路幸也氏との合作『つむじダブル』などがある。迷いながらも真摯に生きる登場人物の姿を、瑞々しい文章で丁寧なすくいあげ、繊細に紡ぎつけている。

♪SPECIAL COLUMN♪

### ブルーハーツとヒロウズのこと

text by 宮下奈都

日本一かつこいロックバンド。ザ・ブルーハーツ(1985-1995)の解散後、メンバーだった甲本ヒロト(Vo.)と真島昌利(G)が結成したのがザ・ヒロウズ(1995-2005)。私は大学に入った年に彼らの歌に出会い、世界がぱーんと鮮やかに弾けて見えました。生きていいんだ！とわけもなく興奮しました。あのときに出会えてよかったと心から思います。

でも、中学生のときに出会った人は、多感な時期に出会って最高だったと覚えているでしょうし、すっかり大人になってから出会った人は、この歌のほんとうのよさは大人にしかわからないと思っているかもしれません。

年齢がいくつでもかまわないのです。ぜひ、今、聴いてみてください。すべての人に聴いてほしいとは思いません。あなたに聴いてほしいだけです。胸を撃ち抜かれます。人生が少し(人によっては、大きく)変わります。保証します。

## 『終わらない歌』の前に読めば、読後の感動が倍増！



『よろこびの歌』  
(実業之日本社)

絶賛発売中  
文庫判 定価 560円(税込)  
ISBN 978-4-408-55099-2

あらすじ  
著名なヴァイオリニストの娘で、声楽を志す御木元玲は、音大附属高校の受験に失敗、新設女子高の普通科に進む。挫折感から同級生との交わりを拒み、母親へのコンプレックスからも抜け出せない玲。しかし、校内合唱コンクールを機に、頑なだった玲の心に変化が生まれる——。見えない未来に惑う少女たちが、歌をきっかけに心を通わせ、成長する姿を美しく紡ぎ出す。単行本刊行時には、<読売新聞読書委員が選ぶ「2009年の3冊」>という読書企画(2009年12月27日朝刊)で、小泉今日子さんが推奨したのをはじめ、書評家、書店員諸氏も絶賛した傑作。巻末の大島真寿美さんによる解説も必読です！

## — 私たちは『終わらない歌』を熱烈にすすめます！ —

宮下さんの作品に共通して、感じるものがある。それは一歩前に踏み出す力を与えてくれる「手」の存在だ。前から手を差し伸ばして引っ張ってくれるようなものではなく、そっと背中を押してくれるような、寄り添ってくれるような。けれど本書には、それだけでなく、これまでにない力強さを感じた。グイッと引っ張られるような、それこそ一緒に歌い出してしまおうような力強さだ。『よろこびの歌』が産み落とされた卵の中で雛の形が定まって行く物語だとしたら、『終わらない歌』は雛が殻を破る瞬間の物語だと思う。  
紀伊國屋書店福井店 奥野智詞さん

追い詰められ、やりきれなさに負けそうになっていた時、この小説がボクを救ってくれました。登場人物を必死に応援する自分。「がんばれ……！」それはきっと自分自身を応援していたのだと思います。  
ブックポート203大和店 成川真さん

素敵な物語でした。『よろこびの歌』で描かれた、学校という狭い範囲の中で、社会に出て一気に境界線が広がった中で鬱屈や戸惑いの方が、宮下さんらしさが存分に発揮されたように思います。  
中原ブックランドTSUTAYA小彩店 長江貴士さん

最後の章で渦巻きとぼしる熱を自分の中に感じた気がして、読み終わるのがもったいないとすら思いました。こんな小説は久しぶりです。夢を持っている人に、停滞している自分が後ろめたい人に、忘れていた熱を思い出したい人に……いろんな人に読んでもらいたいです。  
旭屋書店イオンモール宮崎店 河野里紗さん

“前向きになれる”や、“背中を押してもらえると”いう言葉だけでは表現できないものが、この1冊にたくさん詰まっています。宮下さんと同じ福井で暮らす書店員で良かったな、とつくづく思います。またひとつ、お客様に胸を張っておすすりできる作品と出会えました。  
SuperKaBos新二の宮店 山脇歩美さん

読み終わってグッとこぶしを握ってしまうくらい、熱くなりました！それぞれの道を歩き始めた少女たちの姿がとってもまぶしかったです。夢と現実の間で揺れ動きつつも、覚悟をもって進む姿に力をもらえました！  
三省堂書店京都駅前店 鶴岡寛子さん

ラストの劇団のシーンは玲と千夏の情熱が文章から熱をもって伝わってくるようで、読んでいて鳥肌が立ちます。新作を発表される度に磨きがかかる宮下さんの小説。今後が恐ろしくも楽しみで仕方ないです。  
ハイパーブックス茨木店 森口俊則さん

『よろこびの歌』『終わらない歌』を読んで、生まれて初めて感じたことがある。今まで、本の世界というのは本の中にあると思っていた。しかし、宮下作品は本の中ではなく、本の前に世界が広がっている。本の先に。未来に。それはもちろん作中の少女達の未来でもあり、それを見守る読者の私達の明日でもある。宮下奈都とは希望を活字にする作家なのだ。  
成田本店みなと高台店 櫻井美怜さん

『よろこびの歌』は自分の存在を肯定する物語として、『終わらない歌』は肯定した自分の居場所を確立するための物語として読んだ。彼女らは苦しみ、悩み、時に立ち止まる。しかしその度に過去から聞こえてくる歌声に、隣を歩く仲間たちの姿に励まされて歩いていく。その姿がとても清々しく、応援しないではいられない。  
ジュンク堂書店岡山店 加藤一博さん

やはり、宮下奈都作品はいい!! 心にしみ入って、洗われるようで、本当に読んでいてなごみます。自分が高校生や大学生の頃、夢を追いかけて、でも、何をどうすればいいのかわからなくて、とまどい迷いながら、やみくもにつき進んでいったころのことを思い出していました。  
有隣堂厚木店 佐伯敦子さん

悩みながら迷いながら、今を生きている彼女たちに“そのまま夢中に生きて”と声をかけたくなる。輝きのひかりは少し後からついてくるから。みんな、宇宙の星のこどもなのだから。  
じつぶつぶ文京店 清水菜生さん

歌を言葉にすると歌ではなくなる。でも僕は音楽を知っているから言葉から歌が聞こえる。きっと彼女達は最高の歌を僕らに聞かせてくれた。いやこれから聞かせてくれるのかもしれない。ああ！読んで良かった。僕たちもきっと成長していると信じたい。彼女達のように、もがき苦しみながら。  
小田急ブックメイツ新百合ヶ丘北口店 狩野大樹さん

もう、なんと言ったらいいのか……感激でした。とりわけ最後の2編はピリピリきました。伝わってくる熱量というか、エネルギーが半端無かったです。玲のモノローグのあの言葉にずっと浸っていたくて、読み終えたくなくて、最後のページは繰り返し繰り返し何度も読んでしまいました。  
株式会社今井書店企画開発本部 津田千鶴佳さん

みんなみんな自分と戦いながら毎日をがんばって生きている。他人からみたら逃げてるようにも見えることもあるけれど、自分が納得できる答えは自分で探し出して手に入れるしかないんだ。がんばれ、がんばれ、がんばれ！って、宮下先生にはげましてもらった気がします。  
八重洲ブックセンター京急百貨店上大岡店 毛利円さん

宮下さんが描く物語はいつだって、鳥のように空を飛ぶことなく、たった一歩、自分の足と意思で踏み出す物語。『よろこびの歌』から月日が流れ、またあの6人に出会えたなんて夢のようでした。変わらず迷い悩みながらそれでも明日には笑えるように一歩前に進む彼女たちと、終わらない歌を歌いましょう。  
三省堂書店新横浜店 比嘉栄さん

最後の数ページは自然と笑顔がこぼれてしまうような、ほんわかとした幸せな感動に包まれ、前作本作ともに、至福の読後感を味わうことができました。彼女達の今後の活躍がまだまだ気になります。第三弾の刊行予定はいつですか？  
NET21ブックスページワン赤羽店 清宮久雄さん

前作から3年が経ち、それぞれが新しい世界で悩み闘ってゆく今作。前作の感動が大きかっただけ続編のハードルは上がる、それでも自信を持って薦めたい1冊。友人にだったら「映画で言ったらターミネーター2みたいなものだよ！」『よろこびの歌』を読んでいなくても面白い読んでいればより面白い！  
サクラ書店平塚ラスカ店 柳下博幸さん

どうして宮下さんの小説って、こんなにもさらさらの湧き水のように心にしみこんでくるのだろう。こういう言葉が欲しかったんだ、と気になる文章を書き出してメモしてポケットにしまう。きっと何度も取り出して読み返す。読み返してほっとする、まだまだ大丈夫だ、とほっとする。……ああ、そうか、この小説は、僕や君や彼等が明日には笑えるために生まれてきたんだな。  
精文館書店中島新町店 久田かおりさん

派手なアクションとか個性の強い主人公が大活躍するとか壮大な世界観を背景に物語が展開していくとか、そういった派手な要素はひとつもないのに、最終章での爆発力がとにかくものすごい。ピアニッシモのようなごくごく弱い導入部分から、激しく強いフォルティッシモで最高の盛り上がりを見せた最終章、本当に歌が聞こえてきそうでした。  
2012年の終わりに岡高の小説と出会えました。  
ジュンク堂書店福岡店 小峠早織さん

挫折や絶望がすぐそこにあるからといって、辿り着けない場所に夢があるからって、自分に期待しない理由になんてならない。重くて厳しいものだと知っていてもなお、私達は希望を抱く。そのための震えるような勇気を、きっと持っているのだと信じる。この作品が、歌って。信じようよと歌って。だから、終わらない歌を歌おう。終わらない歌を歌おう。終わらない歌を歌おう。  
紀伊國屋書店富山店 野坂美帆さん